

ダニエル書 - 第21番

節度をもって

Jeff Pippenger

2023-12-16

私たちはイザヤ書第27章を読み進めています。というのも、それがイザヤ書の続く章の文脈を確立するからです。続く章々は、「後の雨」を正しい聖書的な方法論として示しています。この方法論は、認識されて用いられると、受け入れられたときにそれに対応する経験を生み出す預言的メッセージを明らかにします。

2001年9月11日、神のかつての契約の民であるセブンスデー・アドベンチストの人々に向けて歌われるべき歌は、彼らが神の民として退けられつつあるという内容のものである。というのも、神がご自分のぶどう園に実らせることを意図された実を彼らが結ばなかったからである。その歌は、神が植えられたぶどう園により表される契約関係、また1863年に彼らがつまずきの石を拒んだことを基盤としているはずであった。彼らは1856年にラオデキアとなり、七年間、すなわち「七たび」、あるいは二千五百二十日間、神は入ろうとしておられたが、1863年に彼らはその方に対して戸を閉ざした。

2001年9月11日以来、彼らは、日曜法のとときにその口から完全に吐き出されるのに先立って、あらかじめ束にまとめられている。2001年9月11日以降、アドベンティズムに向けて歌われるべきメッセージはラオデキアのメッセージであり、それはぶどう園のメッセージで、尊い石を「見る」ことも「味わう」ことも拒む者を打ち砕く「つまずきの石」を含んでいる。イザヤの箇所にあるラオデキア人への約束は、この最後の警告を受け入れることを選ぶアドベンチストは誰でも、キリストの「力をつかみ」、彼らがキリストと「和解する」ことができるように、なお時間が残されているということである。というのも、キリストはいまだに彼らと「和解する」ことを望んでおられるからである。しかし、まもなく来る日曜法の直前、真夜中の叫びのときには、その機会は永遠に終わる。

2001年9月11日に始まった時期において、神は、かつて「民ではなかった」者たちを「乾いた地から出た根」とし、「根を張り」「花を咲かせ芽を出し、世界の面を実りで満たす」と約束された。エッサイの根に花を咲かせ芽を出させるのは後の雨である。というのも、花を咲かせ芽を出すことになっているその根は、掲げられる旗印となるように預言的に定められており、その旗印こそがエッサイの根だからである。

その日、エッサイの根が現れ、民の旗印として立つ。異邦の民はそれを尋ね求め、彼の憩いの所は栄光に輝く。イザヤ書 11:10

後の雨は、2001年9月11日からエッサイの根に花を咲かせ、芽吹かせ始め、間もなく到来する日曜法の時に、その根は全地を實で満たすだろう。イザヤ書27章における日曜法は、ダニエル書1章から3章にも表されている漸進的な歴史である。後の雨は、第三の災いのイスラムが解き放たれて直ちに抑え込まれ、諸国民が怒った2001年9月11日に降り始めた。

ここで述べられている「その苦難の時の始まり」は、災いが注ぎ始められる時を指すのではなく、キリストが聖所におられる間、災いが注がれる直前の短い期間を指す。その時、救いの働きが終結に向かう中で、地上には苦難が訪れ、諸国民は怒りをあらわにするが、第三の天使の働きを妨げないようになお抑えられている。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが臨み、第三の天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注がれる時期に聖徒たちが堅く立つことができるように備える。Early Writings, 85.

この一節でホワイト夫人は、救いの機会がなお開かれている短い時期があることを明らかにしている。彼女が言及している「艱難の時」は、恩恵期間が完全に閉じられるときに始まる大艱難時代とは区別される。アドベンチズムでは、ミカエルが立ち上がるときに始まる大艱難時代に関連して、それを「小さな艱難の時」と正しく呼んでいる。「小さな艱難の時」は、間もなく到来する日曜法によって国民的破滅が始まり、恩恵期間が閉じられるまで続く期間を表している。

2001年9月11日から日曜令に至るまでの歴史において、アドベンチズムの最終的な浄めと裁きは、後の雨の「振りかけ」の期間に起こるものとして示されている。その期間とは、「回復」でもある後の雨が「振りかけ」として始まり、日曜令での完全な注ぎ出しへと進展していく時である。その期間は、第三の災いとしてのイスラムが諸国民を怒らせるときに始まり、後の雨が降り始める。そして、ある者は後の雨を認めて受け入れるが、ある者は後の雨を認めない。何かが起こっていることには気づく者もいるが、それが何であるかを理解せず、それに対して身構える。

多くの人は、初雨を大いに受け損なっている。彼らは、このようにして神が彼らのために備えられた恵みを、余すところなく受けてはいない。足りない分は後の雨が満たしてくれると期待している。最も豊かな恵みが授けられるときに、それを受けるために心を開くつもりでいる。これは恐るべき誤りである。神がその光と知識を与えて人の心に始められた業は、絶えず前進し続けなければならない。一人ひとりが自分の必要を悟らなければならない。心はあらゆる汚れを取り除いて空にし、聖霊の内住のために清められなければならない。初代の弟子たちは、罪を告白して捨て、熱心に祈り、自らを神にささげることによって、五旬節の日に聖霊の注ぎを受ける備えをした。同じ業を、ただしよりいっそう大きな程度で、今なさなければならない。そのとき人は祝福を求め、自分に関する業を主が成就してくださるのを待つだけでよかった。業を始められたのは神であり、神はイエス・キリストにあって人を完全に、その業を完成してくださる。しかし、初雨に象徴される恵みをおろそかにしてはならない。与えられている光に従って生きている者だけが、さらに大いなる光を受ける。私たちが日々、生きたキリスト者の徳を実践することにおいて前進していなければ、後の雨における聖霊の現れを認めることはできない。それは私たちの周りの人々の心に降り注いでいるかもしれないが、私たちはそれを見分けることも受けることもできないであろう。『牧師たちへの証言』506、507頁。

後の雨はいま降っており、それを認識して受ける者もいれば、認識せず受けない者もいる。後の雨は、受けるためには認識されなければならない。後の雨は単なる体験ではなく、メッセージによって生み出される体験である。しかし、そのメッセージは、それを確立するための正しい方法論が用いられるときにのみ受け取ることができる。後の雨のメッセ

ージを確立する方法論を認識しないなら、ダニエル書と黙示録に示されている諸王国の興亡に表された預言的教訓を理解することは、ほとんど不可能である。

世界に掲げられる旗じるしは、イザヤによって「エッセイの根」と特定されており、第二十七章では「ヤコブから出る者」が「根を張る」とある。「エッセイの根」である者たちは、そこで「イスラエル」とも呼ばれ、まず芽吹き、つぼみをつけて花開き、その後世界を突で満たす者たちである。自然の法則は預言の法則に矛盾しない。自然も預言も、ともに同じ立法者が与えたものだからである。植物が実を結ぶ前には、まず芽によって示されるように休眠から覚め、その後花が咲く。「エッセイの根」である霊的イスラエルは、段階的な雨の注ぎを受ける。それは「振りかけ」から始まり、旗じるしのもたらず実によって世界が満たされるとき、完全な注ぎへと高まる。

イザヤ書第二十七章では、雨の注ぎが始まる起点は、芽が「伸び出す」ときに起こると示されている。最初に「伸び出す」とき、雨は「一定の分量で」注がれるとされる。「一定の分量で、それが伸び出すときに。」2001年9月11日、後の雨の注ぎは「一定の分量で」始まった。というのも、そのとき小麦と毒麦、すなわち賢い者と愚かな者は、なお混じり合っていたからである。

神の御霊の偉大な注ぎ、すなわちその栄光によって全地を照らすあの出来事は、私たちが、神の同労者となるとはどういうことかを経験によって知る、啓発された民を得るまで、到来しない。私たちがキリストへの奉仕に全き心からの献身をささげるなら、神は量り知れない御霊の注ぎをもってその事実を認めてくださる。しかし、教会の大半が神と共に働く者ではない間は、そうはならない。利己心と自己放縦がこれほど明白で、言葉にすればカインのあの答え-「私は弟の番人でしょうか」-を言い表すような霊が支配しているとき、神はその御霊を注ぐことはおできにならない。この時代の真理、すなわち、いたるところでますます濃くなるしるしが万物の終わりが近いことを証しているという事実が、真理を知っていると公言する者たちの眠れる力を呼び覚ますに足りないなら、これまで輝いてきた光に比例する暗闇が、これらの魂を襲うだろう。最後の大いなる審判の日に、彼らがその無関心について神に差し出すことのできる弁解の影すらない。なぜ彼らが神の御言葉の聖なる真理の光のうちに生きず、歩まず、働かなかったのか、そしてその行いと同情と熱心を通して、罪に暗く覆われた世に、福音の力と真実性が論駁しえないものであることを明らかにしなかったのか、その理由として差し出せるものは何もないだろう。

『レビュー・アンド・ヘラルド』1896年7月21日。

イザヤ書27章は、乾いた地から根が芽吹くときに始まる後の雨の注ぎ出しの歴史を示し、地が突で満たされるに至るまでを通して明らかにしている。この章は、「量りをもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論じるであろう」と述べている。後の雨が「しぶき」として量られているとき、ホワイト姉妹は、後の雨は「私たちの周囲の心々に降っているかもしれないが、私たちはそれを見分けも受け取りもしないだろう」と述べている。

このようにして彼女は、雨の降り注ぎを認識する者と認識しない者が混在する教会を示している。前の箇所では彼女は、次のように述べることによって、神が後の雨を限りなく注がれるときに、賢い乙女と愚かな乙女の混在がもはやなくなる時であることを示してい

る。「私たちがキリストに仕えることに全き、全心全意の献身をささげるとき、神は、限りなく御霊を注ぐことによってその事実をお示しになる。しかし、教会の大半が神と共に働く者ではないうちは、これは起こらない。」

教会の大部分、すなわち教会の多数派は、マタイ25章において愚かなおとめたちとして表されている。というのも聖書には「多くの者が召されるが、選ばれる者は少ない」とあるからである。賢い者と愚かな者は、間もなく到来する日曜法に先立つ真夜中の危機において、神の摂理によって分け隔てられる。その分離によって、後の雨における聖霊の全き注ぎを受け、「一日のうちに生まれる国」となる民が生み出される。そのとき、エッセイの根が旗印として高く掲げられ、全地は実で満ちる。

イザヤ書27章は、2001年9月11日に「後の雨」が「量をもって」注がれ始めたとき、「あなたはそれと論争するであろう」と示している。「量をもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論争するであろう。」2001年9月11日の出来事は、世と教会において即座に論争的となった。今日に至るまで——二十年以上たった今も——それらの出来事をイスラムの行為とみなすことに反対し、むしろ何らかのグローバリストの陰謀だとする議論が続いている。後の雨の注ぎの到来に伴う論争は2001年9月11日に始まったが、世で繰り広げられている議論は、神の預言の言葉に示されている「論争」ではない。その論争とは、次に続くような予言をめぐるものである。

あるときニューヨーク市にいた私は、夜のさなか、天に向かって階を重ねてそびえ立つ建物を見るよう促された。これらの建物は耐火であると保証され、所有者や建設者の栄光を示すために建てられていた。さらに高く、なお高くこれらの建物はそびえ、その建造には最も高価な材料が用いられていた。これらの建物の持ち主たちは、「どのようにすれば最もよく神の栄光を現せるのか」と自問してはいなかった。主は彼らの思いの中にはなかった。

私は思った。「ああ、このように自分の財を投じている人々が、神がご覧になるように自分たちの歩みを見ることができたなら！ 彼らは壮麗な建造物を次々と築いているが、宇宙の支配者の御目には、彼らの計画や企てがなんと愚かなことか。彼らは、心と思いのすべての力を尽くして、いかにして神の栄光を現すかを求めてはいない。これこそ人間の第一の務めであるのに、それを見失っているのだ。」

これらのそびえ立つ建物が建てられていくにつれ、所有者たちは、自己の欲を満たし隣人の羨望をかき立てるために使える金を持っていることに、野心に満ちた誇りで喜び勇んだ。彼らがそのように投じた金の多くは、強圧的な取り立てや、貧しい者を虐げて搾り取ることによって得られたものだった。天では、あらゆる商取引が記録されていることを彼らは忘れていた。不当な取引も、あらゆる詐欺行為も、そこに記されている。やがて、人々はその詐欺と傲慢のうちに、主がこれ以上は越えることを許されない一線に達し、ヤハウエの忍耐には限度があることを知るだろう。

次に私の目の前に現れた光景は火災警報だった。人々は高くそびえ、耐火だと見なされている建物を見上げて言った。「あの建物は完全に安全だ。」しかし、これらの建物はまるでタールでできているかのように焼き尽くされた。消防車は破壊を食い止めることは何一つできず、消防士たちはそのポンプを操作することができなかった。『Testimonies』第9巻、12、13。

アドベンチスト教会は、2001年9月11日の直後、このような箇所を世間から隠そうとした。これがニューヨーク市、そして続いて起こった火災を消防車が消し止めることのできなかった非常に高い建物のことではないなどと、どうして言えるのか。アドベンチスト教会が女預言者によって書かれたと公言している著作の中のこのような一節が、そのような成就の後に大々的に宣言されないなどということが、どうしてあり得るのか。

予言的な「論争」の到来を告げる後の雨のぱらつきの到来は、アドベンチズムの最後の反逆も明らかにする。というのも、まさにそこで、彼らは自らが残りの民の女預言者と認める者の明確で平易な言葉を完全に拒絶するからである。

サタンは…偽りを絶えず持ち込み、真理から引き離そうとする。サタンの最後の欺きは、神の御霊の証しを無きものにするのである。「幻がなければ、民は滅びる」（箴言29:18）。サタンは、さまざまな方法で、またさまざまな手先を用いて巧妙に働き、神の残りの民が真の証しに寄せる信頼を揺るがそうとする。

証言に対してサタンの憎しみがかき立てられるだろう。サタンの働きは、諸教会がそれらに寄せる信頼を揺るがすことに向けられる。その理由はこうである。もし神の御霊の警告と叱責と勧告に耳が傾けられるなら、サタンは自分の欺きが入り込み、人々の魂をその惑わしで縛り上げるための、これほど明確な足場を得ることはできないからである。『選ばれたメッセージ』第1巻、48頁。

麦と毒麦の双方を束にするという予言的な過程は、2001年9月11日に預言の霊への反逆とともに始まり、その反逆は1863年に聖書に対して始まった漸進的な反逆の終結を画した。

私たちは一つの民として、地上のほかのどの民にも先んじて真理を有していると公言している。ならば、私たちの生活と品性は、そのような信仰と調和していなければならない。天の穀倉のために尊い穀物が束ねられるように、義人が束ねられるその日は、まさに私たちの目前に迫っている。一方、悪人は毒麦のように、最後の大なる日の火のために集められる。しかし、小麦と毒麦とは「収穫まで共に育つ」。

『Testimonies』第5巻、100頁。

これらの建物が倒れたときに黙示録18章1～3節が成就すると明言している次の一節を、アドベンチズムはどうして無視できたのか。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！その時、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

ここで私たちが取り上げている問題は、2001年9月11日にこれらの聖句が成就したかどうかではありません。というのも、それらは間違いなく成就したからです。むしろ、私たちが取り上げようとしているのは、その時に始まることとなる「論争」です。その論争は、方法論が正しいのか誤っているのかをめぐるものでした。アドベンチスト教会は1863年にウィリアム・ミラーの預言解釈の十四の規則を退け始め、いまや、アドベンチストの神学者が著した聖書研究書で、背教的プロテスタント主義およびローマ・カトリックの神学者たちから繰り返し支持を受けていないものは、購入することができないほどの段階にまで至っています。1863年から2001年に至るまで、そして今日に至るまで、当初ウィリアム・ミラーの預言解釈の規則によって体現されていた方法論は退けられ、ローマ・カトリックおよび背教的プロテスタント主義の方法論に置き換えられてきました。黙示録18章1～3節が成就したときに始まった預言的な「論争」は、真の方法論か偽の方法論かをめぐるものでした。

次の記事で、イザヤ書第27章の「論争」についての考察を続けます。

「私たちは自ら、キリスト教の本質は何か、真理とは何か、私たちが受けた信仰とは何か、聖書の規則-最高の権威から私たちに与えられた規則-とは何かを知っておくべきである。」『1888年資料』403頁。